

第3章 中世の文化（鎌倉・室町時代）

第2講 南北朝の文化と室町仏教

1. 南北朝の文化

a 背景—南北朝動乱の反映→軍記物語・歴史書など

b 歴史文学・軍記物

軍記物 『太平記』—南北朝の動乱, 小島法師?

太平記読み (『太平記』を節付けして読む者)

歴史書 『神皇正統記』—南朝の正統性, 北畠親房

伊勢神道の理論, 「大日本国は神国なり」で始まる

常陸國小田城で執筆

『梅松論』—足利幕府の正当性, 作者不明

南北朝の戦記

『増鏡』—四鏡の最後 (大鏡・今鏡・水鏡)

鎌倉時代 (後鳥羽上皇～後醍醐天皇) の時代.

二条良基?

c 学問思想

有職故実—朝廷儀式の研究

『建武年中行事』—後醍醐天皇. 宮中の年中行事を月ごとにまとめる

『職原抄』—北畠親房. 官職制度など

d 芸能

連歌—和歌の余技, 上の句 (5・7・5) と下の句 (7・7) を別の人が交互に詠む

二条良基—連歌の方式と地位を確立

『菟玖波集』(最初の連歌集, 準勅撰とれて連歌の地位を高める)

『応安新式』(連歌の規則書)

茶の湯—茶寄合 (茶の会合, 自由な酒食をともなう)

闘茶 (茶の産地をあてる競技)

能楽—猿楽能 (寺社の祭礼) + 田楽 (民間)

宗教的芸能から庶民的な舞台芸術に発展

四 鏡

おおかみ 『大鏡』	平安末期	作者不明	道長の栄華を批判的に叙述／「世継物語」ともいう <small>よつぎ</small>
いまかがみ 『今鏡』	1170年	藤原為経	『大鏡』以後の1025～1170年までの歴史
みづかがみ 『水鏡』	鎌倉初期	中山忠親？	『大鏡』以前の神武～仁明天皇までの歴史
ますかがみ 『増鏡』	南北朝	二条良基？	後鳥羽～後醍醐天皇までの歴史

南北朝の文化まとめ

南 朝（後醍醐天皇）	北 朝（室町幕府）
『太平記』（小島法師？）	『難太平記』（今川了俊〔貞世〕）
『神皇正統記』（北畠親房）	『梅松論』（足利氏関係者？）
『建武年中行事』（後醍醐天皇）	
『職原抄』（北畠親房）	

2 室町期の仏教

a 臨済宗の発展

足利尊氏が夢窓疎石に帰依

天竜寺（後醍醐天皇の冥福）

安国寺・利生塔の建立（国ごとに建立，戦没者を弔う）

五山・十刹の制度—3代足利義満（南宋にならって禅宗の保護・統制）

南禅寺(最上位)	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
京都五山	天竜寺	相国寺	建仁寺	東福寺	万寿寺
鎌倉五山	建長寺	円覚寺	寿福寺	浄智寺	浄妙寺

僧録司—五山の管理，初代僧録・春屋妙葩

五山の僧—外交・政治顧問として活躍

五山文学—漢詩文の研究 五山版の出版

義堂周信・絶海中津（五山文学の双璧）

林下—五山派に対し，自由に民間布教した禅宗諸派

臨済宗の大徳寺（一休宗純=『狂雲集』〔漢詩〕など

曹洞宗（永平寺〔越前〕・総持寺〔能登〕）

b 新仏教（民衆仏教）の発展

浄土真宗（一向宗）→本願寺派の発展

蓮如（本願寺8世）

御文（布教のために書いた手紙）

講（信者の団体）を組織=惣村の結合を利用

越前吉崎道場（1471，寺内町に発達）

山科本願寺（京都）を拠点→のち石山本願寺を拠点

一向一揆=加賀の一向一揆（1488～）など

日蓮宗（法華宗）

日親（鍋冠り上人）

15世紀，京都の商工業者（町衆）に布教

義教（6代）に『立正治国論』を著作して諫言，拷問を受ける

法華一揆（1532）—一向一揆（山科本願寺）を焼き打ち

天文法華の乱（1536）—法華一揆が延暦寺と対立して破れる

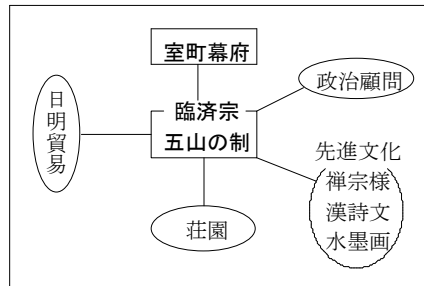
c 神道

唯一神道—吉田兼俱 伊勢神道の神本仏迹説を発展
神を儒・仏の上において統合

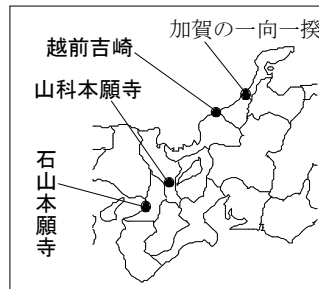
五山・十刹の制



室町幕府による臨濟宗の保護



蓮如の布教



史料1—『御文』（『御文章』）=蓮如

夫、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、「おおよそはかなきものはこの世の始中終。まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身をうけたりという事をきかず、一生すぎやすし。・・・おくれさきだつ人は本の雫、末の露よりもげし」といへり。されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。・・・されば、人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば、たれの人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて念仏もうすべきものなり。あなかしこあなかしこ。

参考・中世仏教史の流れ

臨濟宗と幕府

鎌倉	栄 西	建仁寺（京都）	源頼家（2代将軍）
		寿福寺（鎌倉）	北条政子（尼将軍）
	蘭溪道隆	建長寺（鎌倉）	北条時頼（5代執権）
	無学祖元	円覚寺（鎌倉）	北条時宗（8代執権）
	一山一寧	—————	北条貞時（9代執権）
室町	夢窓疎石	天竜寺（京都）	足利尊氏（初代）
	春屋妙葩	相国寺（京都）	足利義満（3代）

浄土教系の発展

鎌倉	法然	浄土宗	専修念仏	源平争乱
	親鸞	浄土真宗	悪人正機説	承久の乱
	一遍	時 宗	踊念仏	蒙古襲来
室町	蓮如	浄土真宗	御 文	応仁の乱
	顕如	浄土真宗	一向一揆	石山合戦

法華宗（日蓮宗）の発展

鎌倉	日蓮	『立正安国論』——→ 北条時頼 ※元寇を予言
室町	日親	『立正治国論』——→ 足利義教（6代） ※鍋冠り上人

確認テスト

1 南北朝の文化

南北朝対立の動乱期には、戦乱を背景に様々な軍記物や歴史書が著作された。『（ 1 ）』は南朝の立場から南北朝動乱を描いた軍記物である。北畠親房の『（ 2 ）』は神国思想により南朝の正統性を唱えた歴史書で、常陸国小田城で北朝と戦いながら記憶をたよりに執筆したものであった。一方、『（ 3 ）』は足利氏の立場に立って鎌倉幕府の治積から南北朝の内乱を経て尊氏が政権を掌握するまでの過程をえがいた歴史書で、『（ 4 ）』は鎌倉時代の歴史を公家の立場から編年体で記し、『大鏡』をはじめとする四鏡の一つに数えられている。

学問の分野では、後醍醐天皇の『（ 5 ）年中行事』や北畠親房の『（ 6 ）』などの有職故実の研究書が著された。いずれも南朝の中心人物が著したもので、朝廷儀式のあり方を示すことで南朝の正統性を主張したものと見えよう。

2 室町期の仏教

南北朝時代、臨済宗に（ 1 ）が出て、将軍足利尊氏の帰依を得て（ 2 ）寺を建立した。また、尊氏にすすめて、元弘の変以来の戦死者を弔うため国ごとに（ 3 ）寺を建て、（ 4 ）塔を建てさせた。その門流はやがて室町幕府と密接な関係をもつことになり、足利義満は夢窓派の春屋妙葩のすすめにより（ 5 ）寺を建立した。（ 5 ）寺の建立を契機に、義満は五山・十刹の制度を整備し（ 6 ）寺を五山の上とし、その下に京都・鎌倉の五山の位階を定めた。これに先立ち義満は五山派の住持の任免・昇進その他大きな権限をもつ（ 7 ）を置きその初代に春屋妙葩を任じていた。こうした五山・十刹の位階による寺格の確定と（ 7 ）の設定は五山派を室町幕府の保護統制のもとに置くことになり五山派は官寺的性格を強めた。五山では、五山文学と総称される（ 8 ）文の伝統があったが、この時代に絶海中津・（ 9 ）が出て最盛期を迎えることとなった。

五山派以外の禅宗寺院を（ 10 ）とよぶが、その中心の曹洞宗では道元以来の永平寺や総持寺、臨済宗では取えて私寺の立場を選んだ大徳寺、そして妙心寺などがある。とりわけ大徳寺には五山派の禅風に不満をもつ僧があつまるといふようになり、そのなかから「狂雲子」を自称し権力

- 1 太平記
- 2 神皇正統記
- 3 梅松論
- 4 増鏡
- 5 建武
- 6 職原抄
- 1 夢窓疎石
- 2 天竜
- 3 安国
- 4 利生
- 5 相国
- 6 南禅
- 7 僧録
- 8 漢詩
- 9 義堂周信
- 10 林下

と癒着した僧への痛罵と破戒無慙^{はかいむざん}の言動で知られる（ 11 ）のような僧がでた。

室町より戦国時代にかけては浄土真宗（一向宗）と日蓮宗の発展が目ざましかった。親鸞は生涯を通じて弟子一人、寺院一つをももつことを拒んだが、後に子孫が祖廟を本願寺とし、開祖の血脈をひくものが法主として頂点に立ち、教団を組織するようになった。特に八世（ 12 ）は越前の（ 13 ）道場を拠点に教線を拡張し、（ 14 ）とよばれる平易な手紙による民衆教化を行った。門徒は惣の形成の進んだ地方では（ 15 ）を単位として組織された。

一方日蓮宗（法華宗）では15世紀中ごろ「鍋冠り上人」と呼ばれた（ 16 ）が出て、関東から九州へ布教し、更に上京して京都に勢力をのばした。とくに京都では町衆の心をとらえ、市政を左右する程の力を持ち、法華一揆をおこした。しかし、（ 17 ）寺の衆徒との対立を深め、1536年京都市中の日蓮宗寺院が焼きはらわれた天文法華の乱により教勢は一時おとろえた。

室町時代の神道では、（ 18 ）の唯一神道がある。これは儒教・仏教を取り入れただけでなく、反本地垂迹説に立って一切の神道の統合をはかったのであった。

11 一休宗純

12 蓮如

13 吉崎

14 御文

15 講

16 日親

17 延暦

18 吉田兼俱